

旧約聖書講解シリーズ

# サムエル記

A・マクシェーン

FIRST&SECOND SAMUEL

Lessons for Leaders

by

Albert McShane

# サムエル記第一、第二 講解

指導の任にある者のための教訓

サムエル記第一、第二に描かれた牧会の原則

A・マクシエーン著

伝道出版社

# **FIRST & SECOND SAMUEL**

**'Lessons for Leaders'**

**by**

**Albert McShane**

**Publishers**

**John Ritchie Ltd.**

**Kilmarnock, Scotland**

**Evangelical Publishers**

**Tokyo, Japan**

## 目次

前書き	5
サムエル記第一に描かれた牧会の原則	
サムエル記について	9
預言者サムエルの誕生（一章1節—三章21節）	13
契約の箱の移動（四章1節—七章2節）	46
さばきつかさサムエル（七章3—17節）	60
サムエルに代わるべく選ばれた王サウル（八章1節—一二章25節）	63
サウルの統治と王位剝奪（一三章1節—一五章35節）	93
ダビデの油そそぎとサウルの王宮への召し（一六章1節—二〇章42節）	114

「無法者」としてのダビデの暮らし（二二章1節—二七章12節）	140
サウルと息子たちの死（二八章1節—三二章13節）	172
サムエル記第二に描かれた牧会の原則	
序論	195
サウルの死の報告とヘブロンにおけるダビデの統治（一章1節—四章12節）	201
ダビデによる全イスラエルの統治と彼の繁栄（五章1節—一一章1節）	233
ダビデの大きな罪とその悲しい結果（一二章2節—一四章33節）	274
アブシャロムの反乱と死（二五章1節—二〇章26節）	305
終わりの補足（二二章1節—二四章25節）	355

## 前書き

世には「不法」がはびこりつつある。高い地位にある人々は、この急速に広まりつつある「疫病」の治療法を考え出そうと心を砕いている。しかし、聖書に精通している人々は、「不法の人」(Ⅱテサロニケ二・3)が出現する時までこの病が広がり続け、まことの支配者なるキリストが御座に着かれるまで、決して根絶やしにされないことを知っている。

この世の霊が、しばしば聖徒の諸集会にまで侵入しており、この「集会という神の領域」ですら不従順の証拠が見いだされる。「主の御名のもとに集っている」と主張している信者の中にも、自分たちは好きなようにふるまうことができ、「自分の目に正しいと見えること」(士師記二一・25)を行う自由がある、などと心の中で考えている者が少なからずいる。しかし、新約聖書の書簡、特にテモテへの手紙第一を見れば、神の家——地域集会——は長老(監督)たちによって秩序が保たれるべきであり、聖徒たちはその働きのゆえに彼らを尊敬すべきである、ということは一目瞭然(りょうぜん)である。長老(監督)たちは神の家を治めることに関して主に対して責任を負っているのである。

サムエル記第一にはイスラエル王国の初期の歴史が記されており、実際には、この書巻から「列王記」が始まると言ってもよい。「万軍の主」という神の称号も、この書巻に初めて登場する。この称号はサムエル記第一の特徴を反映している。天の軍勢を治められるお方は、ご自分の代わりにだれかが地上で御民を治めるよう期待しておられるからである。

かつて、イスラエルの盛衰がその指導者たちによって大きく左右されたのと同じように、それぞれの集会の盛衰も、そこで責任をとっている者たちによって決まる。したがって、集会の発展のためには敬虔な指導者の存在が不可欠である。あらゆる時代を通じて、霊的な信者はこのような指導者の必要性を痛感してきた。しかし、特に近年、この必要性はいっそう痛切なものとなっている。それは「時代精神」（訳注：神に敵対している社会的な風潮、不敬虔な雰囲気）のためであると同時に、この働きに伴う犠牲があまりにも大きいからである。本書に書き記した注釈や教訓が、本書を読まれる方々に、特に、聖徒たちを牧するため神に訓練されつつある方々や、すでに責任を担っておられる方々に、わずかなりとも役立てば、この書物を書くために費やした時間が無駄でなかったことになるだろう。



サムエル記第一に描かれた牧会の原則





## サムエル記について

長年にわたって、聖書の中の「歴史書」は、注解者たちの正当な評価を受けてこなかったようである。とはいえ、聖書に登場する人物の研究は大勢の人々の興味をそそっており、聖書研究におけるこの分野では多くの資料が入手できる。しかし、それらの資料を利用することには二つの危険が伴う。まず第一に、聖書の人物研究では、前後の文脈からその人物だけを取り出して考察する。第二に、「聖書人物伝」なるものは、編集の際に元の聖書の大部分が省略される。これでは、むとんちやくな読者が、「歴史書」の中の記録の多くを大して重要でないと思つたとしても仕方がない。しかし、注意深く聖書を学ぶ者は、そういう細部からも重要な教えを学び、うっかり見過ごしてしまいがちな宝への鍵かぎを発見する。

サムエル記第一と第二はもともと一つの書卷であったが、旧約聖書のギリシャ語版（七十人訳）では四卷からなる「列王記」の最初の二卷となっている。だがこの「列王記」を編集したのかは分からない。それがサムエルでなかったのは確かである。その中に記された多くの出来事のはるか

以前に彼は死んでいるからである。サムエルやガド、ナタンは、自分たちが生きた時代の出来事を書き残したようである。それら貴重な記録をサムエル記の編集者が利用したと考えても間違いないだろう。これらの歴史書には注目すべき特徴がいくつかある。その一つは、長い「空白の期間」がいくつかあり、その期間の出来事については何も記されていないことである。このことから、著者が資料を取捨選択したことが分かる。次に、この書卷ではイスラエル王国のことが中心に記述されているが、同時に神の家での礼拝と奉仕にも細心の注意が払われていることである。このことから、「礼拝」と「統治」の密接な関係が理解できる。最後は、この書卷において預言者たちに与えられている重要な役割である。このことから、神によって任命された指導者であっても、神が遣わされる者の働きを必要としたことが分かる。

サムエル記は、大まかに見ても、サムエルの誕生からダビデの生涯の終わり頃までを取り扱っていることが分かる。最初の方の章では、選ばれた場所シロにあった幕屋と、その地から神のご臨在のあかしが取り除かれたこと（契約の箱の移動）に焦点が当てられている。終わりの部分には、ダビデが神殿のための材料を準備したことと、神殿を建てるべき場所を見いだしたことが記されている。サムエル記第一、二章のハンナの歌は、サムエル記第二の二二章に記されているダビデの「詩篇」——ダビデの歌——によく似ている。最初の七章では、おもにサムエルに関する出来事が扱われ、続いて、最初の王サウルの物語と、やがて彼が神に退けられる出来事が続く。そして、この書